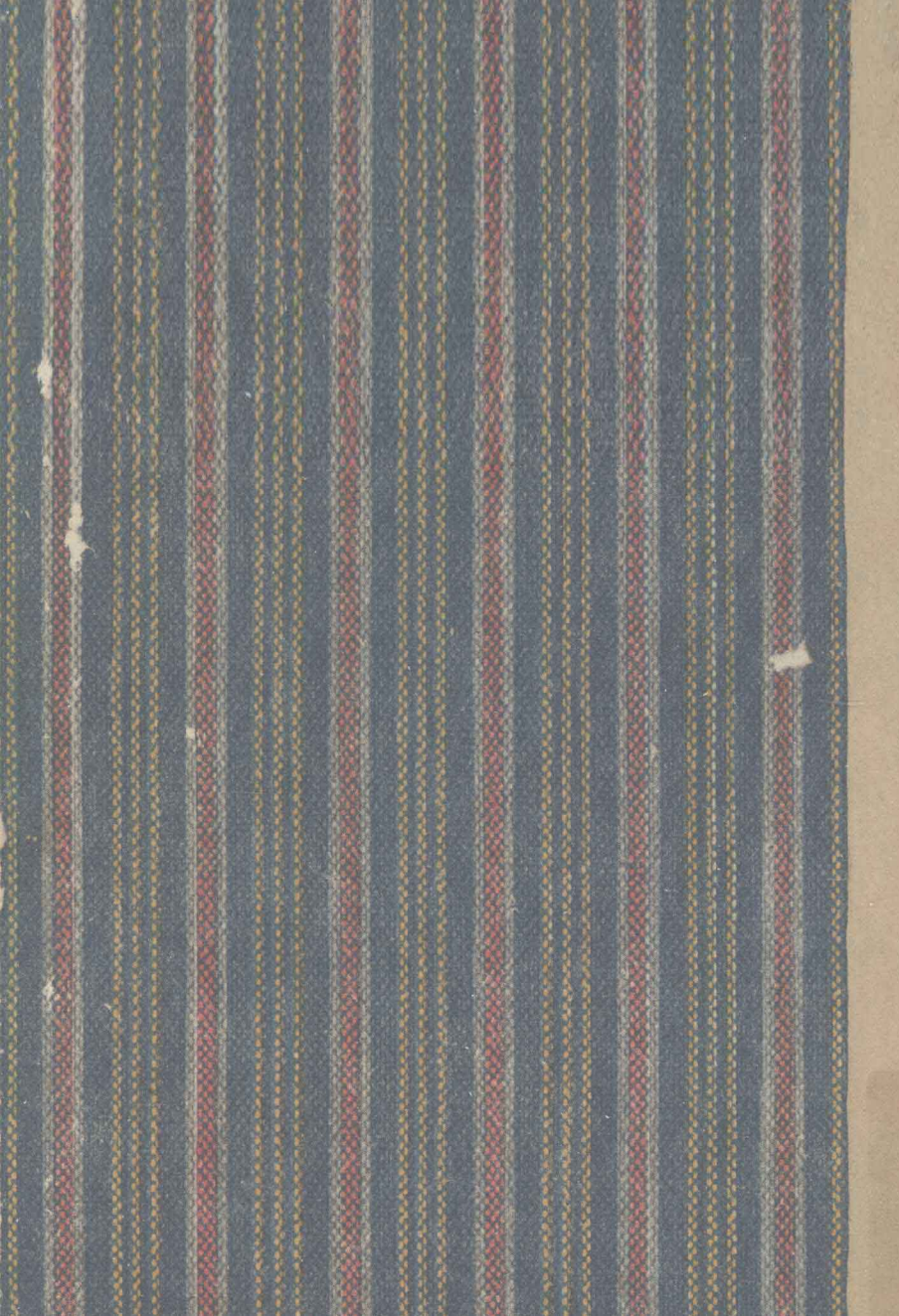




木村莊八著

東京今昔帖

東峰書房版

著者略歴

明治 26 年 8 月東京日本橋区吉川町に生る。

明治 43 年中学課程修了後通い初めた「旧白馬会」研究所で岸田鮎生を知り親交を結ぶ。

大正元年「フューザン会」の結成に参画。

大正 5 年岸田鮎生等と「草土社」をつくる。

大正 12 年「春園会」成立の当初からこれに参加して現在に及ぶ。

著書——旧著に美術に関するもの多く近刊に「東京の風俗」

「南嶽隨筆」「ナイル河の草」「現代風俗帖」「鏡現代風俗帖」等あり。

東京今昔帖

昭和二十八年十二月二十日
昭和二十八年十二月二十五日

初版印刷
初版発行

定 価 三二〇円
地方売価 三四〇円

著 者

木 村 莊 八
むらもと しょうはち

発 行 者

三 ッ 木 幹 人
みつぎ けんじん

印 刷 所

明和印刷株式会社

発 行 所

東 峰 書 房

東京都十代田区九段四ノ二一
電話 九段(33)七一七三番
振替 東京一七一五二六番

落丁、乱丁は本社にてお取換えいたします。

はしがり

私の書きものは、その新聞や雑誌に記し寄せたものを、却つて自分の手許に置くより三ツ木君に保管や整理を托しておく方が後日のとりまとめに便宜なので、さうしてゐます。適当にそれがたまると、三ツ木君（東峰書房）がそろそろ本にしないかと云つて來ます。それを機に、巻頭又は巻末のいはゆる「書きおろし」一篇を添へて、出版することにしてゐます。——この本もその一つで、第三冊目。これは「続現代風俗帖」（昭和二十八年三月初版）の次に、存外早くまとまつた……。

と思つたところが、この大半は、すでに続風俗帖の時、書房に「蓄積」のあつたものださうで、編輯の都合から、アトへ廻したといふことでした。その「アト」本が、今出る順序で矢継早やでした。

例に依つて巻頭に「東京今昔」一篇を今書き下ろして、版に廻すこととします。

巻末の「両国界限」は、以前の私の本に誌したもの——現在の「上篇」部分——と、最近「柳橋界限」の中にかいた部分——現在の「下篇」——を合せて、首尾を徹したもので、新草の部分も多く、この材料は、一通りこれで「完結」したと思ひます。すでにこれは別々の本で御覧下すつた読者も少なくないことでせう。幸にして——と書きます——さういふ方々を読者に持つてゐることだらうと思ひ、その方たちに多少とも「重複」反復は心ならず思ひ、御詫びしますけれども、新しい読者の方は、通してこれにて御覧下さい。かねがねの読者諸賢に対しては「又も同じコトをこね返して、まとめたな」と笑つて頂き旁々、私の「コケの一つおぼへ」を、ならば、ホメても頂きたい——などと、ざれ言申すものは、

昭和二十八年冬、和田堀

木生

目 次



東京今昔

はしがき・・・・・・・・・・・・・一

東京今昔・・・・・・・・・・・・・二

むかしの銀座・・・・・・・・・・・・・三

古い浅草・・・・・・・・・・・・・五

寄席・・・・・・・・・・・・・六

草色の電車・・・・・・・・・・・・・七

築地明石町・・・・・・・・・・・・・七

年中行事・・・・・・・・・・・・・五

私の放送

僕　の　正　月	・	九
東京女の受け口	・	八
下町の滋味	・	五
下町かたぎ	・	九
元　　服	・	九
昔ありし家	・	五
ベニラ坊	・	一
瀬東の変遷	・	五
新東京風景	・	二
愛宕山時代	・	三

俗曲のいのち・・・・・・・・・・二七

江戸から東京へ・・・・・・・・・・二五

てっぼう

春芝居・・・・・・・・・・二五

源氏店・・・・・・・・・・二七

菊五郎劇団・・・・・・・・・・一六

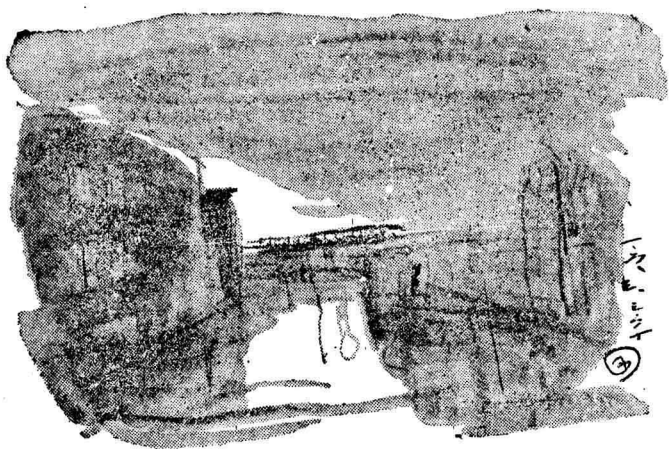
海老蔵小感・・・・・・・・・・一五

菊五郎小感・・・・・・・・・・二七

和田堀雜記

鶴次郎の足	一五
ゑそらごと	一六
文樂回想	一七
能樂進出	一八
バレエ	一四
少年の頃の読書	一五
南縁	一九
秋偶感	二〇

東京
今
昔



東京今昔

一

大辻司郎が墮ちた飛行機の時だつた。その一月ばかり前に、未見の人ながら或る実業家が榮転するについて、お祝ひの絵を贈る相談を友人のK君から受け、それは日本画のX君のやうな明るくて美しい絵が良いだらうと、改めて僕から、K君をX君に紹介する手紙を書いたことがあつた。僕はその時に、その絵を贈る先きの実業家の名を手紙の中に書きながら、それが珍しい苗字だつたので、暫く記憶を去らずにゐた――

ところが三原山の飛行機のことがあると、僕としては特殊の愕きを感じたのは、その遭難者の名の中に、つい最近、珍しい苗字だと思ひながら書いた名の、その大々とした活字が、夕刊に明々と出てゐたことだつた。

思ふにその人は、「榮転」する爲めに、新しい土地へ、その飛行機で、東京を飛立つたに相違

なかった。東京を立つ前に恐らくその人は、X君の絵を喜んで見て居られたことだらう。X君が大変良い絵をかくてくれたと、僕が友人のKから紹介の札を云はれたのが、これはまた、ついその一週間か、十日前のことだった。

何かのビッグ・ニュースがあると、それに関連して「知つた人」がその中に立交る悲・喜、それ／＼のつながりは、我々お互ひの間で、よく語り交されることであるが、或ひは戦争中のアツツ島玉砕の時であるとか、中共から帰還のものの名がニュースに伝へられる折りだとか、さういふ折り目折り目に……アツツ島の時には、丁度その頃、北のあの辺へ持つて行かれてゐたらしかつた春陽会の「小柳秀太郎」の名が、若しや？「玉砕」の中に交つてはゐないかと、新聞の一頁全面に涉つて、六号活字でベタに組まれた戦歿者氏名を、上から下まで、一々、指でおさへおさへしながら、僕は真剣に、点検したものだつた。

「小柳」の名は、その時、幸、僕の点検する「指先き」で、おさへずにすんだものを、今はそれとは逆に、いきなり「珍らしい苗字」、それをつい最近、自分が慶事に事寄せて書いたばかりだった人の名を、その「名」の方からいきなり眼へ飛付かれて、無惨な三原山遭難者の中に、確認しなければならなかつた。

矢張り「飛行機」は墮ちるものであらうか。未見とは云ひながら逢つたも同然の、親しい記憶

の中に生きる「知人」を一人、僕は「飛行機」で、失つてゐるわけだつた。

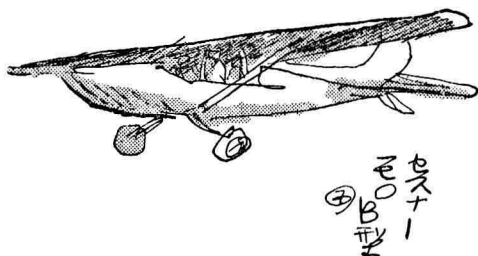
同時にその木星号で失つた「大辻司郎」氏は、これはまた、万人の知る人であつたところから

云へば、我々は殆んど誰でも、知人を一人は、不慮の飛行機事故で、失つてゐるといふことになるだらう。

飛行機はまだ墜ちるものだらうか。

——昨日（二八・六・一九）の新聞で見ると、米軍のグローブ・マスター、「地の王者」とも訓まれる名であらうか、これが百数十名の乗員もろとも墜ちて、「世界航空史上最大の事故」（生きたものは一人も無い）と報ぜられると共に、

○仏印でも三十三名、フランス当局の発表によれば、云々……十八日に、ダクタ旅客機が標高六百米のバクセ附近の山頂に衝突して、乗員全部死亡した。



○ブラジルでも墜落。ブラジル航空会社の四発旅客機一機は、十七日夜ブエノスアイレス郊外の丘に墜落、乗員十七名死亡した。

(二八年六月十九日・読売)

こんなわけで、一日に一機づつ、何処かしらで、一瞬間に沢山の人の死ぬ、飛行機事故が起るやうである。

全く「飛行機」はどうしても矢張り墜ちるものだらうか。——鳥はめつたに墜ちないやうだが、飛行機はまだまだ「鳥」とは非常な隔たりの有るものだらうか。「空中」は「人間」にはまだ許されないものだらうか。

非常に遠い昔のことを本で読むと、はじめ人間は——「人間」とおぼしきもの、と云つた方が正しいかもしれないが——それは、先づ二本足で立つて地上を歩くといふことがタイヘンな「發明」だつたらしい様子である。獸類を下世話に「四つ足」と云つて、人間は四肢が、「手」と「足」とにはつきり分けてある。しかし、そもそものはじめは、我々の祖先、人間とおぼしきものも、「四つ足」だつたといふことである。

今の飛行機はまだまだ昔の「四つ足」が「人」たるに距離のあつた程に、空中を平気で飛ぶ「鳥」とは甚だしい違ひがあるものだらうか。